

女性史研究と オーラル・ヒストリー

倉敷 伸子

はじめに

- 1 女性史におけるオーラル・ヒストリー経験 - 1970年代まで
- 2 オーラル・ヒストリー経験の課題
- 3 オーラル・ヒストリー研究と女性史の経験

はじめに

近年、政治史の御厨貴が述べたオーラル・ヒストリーの定義（「公人の、専門家による、万人のための口述記録」⁽¹⁾）が、しばしばオーラル・ヒストリー自体の定義として援用されている。しかし、本誌特集に際してこの小論に与えられた題目（「女性史研究とオーラル・ヒストリーについて」）の「女性史」を、女性を主語とし、女性であることの歴史的な位置づけを問う歴史叙述と解釈するのならば、女性史が蓄積してきたオーラル・ヒストリー経験はこの定義の外にある⁽²⁾。女性史が対象としてきた語り手の多くは、文字資料に掬い上げられることのない、「公人」の対極にいる人々である。聞き取る側は、専門家であるか、否かを自身に問う余裕は持ち合わせていなかったし、そもそも、長らくアカデミズムの外から発信してきた女性史に、オーラル・ヒストリーの「専門家」はいなかったと思われる。このような両者の間で生まれたオーラル・ヒストリーが「万人のため」のものであるとの保証は、どこにもない。しかし、女性史は、いくつかの陥穽にさらされながらも、語り手と読み手を結びつける歴史叙述を確かに生み出してきた。

(1) 御厨貴『オーラル・ヒストリー』（中央公論社 2002）p.5。

(2) 本誌585号、江頭説子「社会学とオーラル・ヒストリー」は、御厨貴の主張を引用して、日本の歴史学上のオーラル・ヒストリーは、政治史の領域において発展し、また政治史のリードで市民権を得たが、近年、対象を「公人」から「市井の人々」に広めてよいと考えはじめられている、と位置づけている。小論は、この位置づけと立場を異にする。この差違は、単にオーラル・ヒストリー史のなかで女性史（および、労働史、被差別部落史、アイヌ民族史などオーラル・ヒストリーの蓄積をしてきた諸領域）をいかに評価するかの問題ではなく、何を歴史叙述と見なすかという認識の違いに因るものと思われる。この問題については、小論全体で答えていきたいが、筆者が、歴史叙述の資格は、叙述者の立場、叙述の方法、叙述の価値それぞれにおいて「公的」か「私的」かにより判定されるものではないと考えていることのみ、予め述べておく。

名刺交換でお互いが確認可能で共通言語で成立する調査空間とは異なる場で、蓄積されてきた女性史の経験は、何を発信し、一方でどんな課題を抱えてきたのだろうか、そして、近年のオーラル・ヒストリー再評価の動きに対し、女性史の経験はどのように関与しうるのだろうか。小論では、これらのことを検討しながら、オーラル・ヒストリー研究における女性史の経験の意義について考えていきたい。

1 女性史におけるオーラル・ヒストリー経験 - 1970年代まで

歴史の分野の中で女性史という領域は、オーラル・ヒストリーを取り入れた叙述の先駆けをなした⁽³⁾。その背景には、なにより、文字資料の不足と偏りという事情がある。公文書、回想記、新聞等、遺された文字資料の書き手は、圧倒的に男性であり、しかも、彼らの多くは、自身の視点がジェンダーに強く規定されているとの認識が希薄であった。そのため、史料が書かれた段階で、書き遺される事柄は男性の視点で選択され、女性が主に関与するとされた領域、例えば、日々の家事や付き合い、生殖、女性の労働などは、記録に値しない私的な事柄として扱われてきた。また、1950年代以降、各種意識調査が盛んに行われるようになったが、調査対象者が男性のみに限定されたり、または消費調査で見られるような回答を世帯単位としている調査方法も少なくなかった。これに加え、対象者の分析に男女の区分がないものも多かった。例えば、1953年から実施された統計数理研究所「日本人の国民性」調査は、男女を対象とした調査だが、報告書で職業の性別が確認できるのは、「主婦」という分類項のみだった。1955年から階層移動を軸とした調査をしてきたSSM調査は、1975年まで調査対象者は男性のみであり、男女同じ質問票による調査で男女の対比が可能になったのは1995年調査以降である。史料や調査から抜け落ちていることを明らかにしたいと思えば、聞き書きで補完せざるを得なかったのである。また、このような文字資料から構成された歴史

(3) オーラル・ヒストリーを扱った女性史の叙述としては、早くは、丸岡秀子『女の一生』（岩波書店 1953）、山代巴『荷車の歌』（筑摩書房 1956）、溝上泰子『日本の底辺』（未来社 1958）、三上信夫『埋もれた母の記録』（未来社 1965）等の作品があり、高度経済成長期に入ると、森崎和江『まっくら』（理論社 1961）、山崎朋子『サンダカン八番娼館一底辺女性史序章』（筑摩書房 1972）、真尾悦子『土と女』（筑摩書房 1976）等、ルポルタージュの形式をとった作品が発表される。経済成長の末期に出版された村上信彦の『明治女性史』（理論社 1969～1972）は、「一見平凡に見える」女性の葛藤や体験を描くことにこそ女性史の意味があるという立場にたつ通史であり、叙述には、聞き取りの記録が意識的に組み込まれていた。労働史と女性史が交差する領域では、著者の膨大な聞き取り体験を元に山本茂実が『ああ、野麦峠』（朝日新聞社 1968）を著し、そのネットワークは、中村政則『労働者と農民』（小学館 1976）に引き継がれた。

一方、もろさわようこ『信濃のおんな』（未来社 1969）を嚆矢に、1970年代には古庄ゆき子『ふるさとの女たち』（ドメス出版 1975）、高橋三枝子『小作争議のなかの女たち』（ドメス出版 1978）等、聞き書きを組み込んだ叙述で、地域の視点から歴史を見直した女性史が綴られた。この頃、牧瀬菊枝、折井美耶子、伊藤康子、鈴木裕子らにより労働運動や平和運動の担い手たちへのインタビューもはじめられている。1969年に名古屋女性史研究会が『母の時代—愛知の女性史』を刊行し、1970年代後半以降、女性史グループによる地域女性史の刊行が相次ぐが、この時すでに聞き書きは、その叙述に欠かせない手段となっていた。

叙述は、しばしば、ジェンダーとは無縁の普遍性をもつものであるかのように提示されてきた。男性の体験や視点を基準に描かれ、逆に女性独自の体験は、副次的もしくは特別なものとして扱われる既成の歴史叙述のあり方は、性別のない「国民」という像を掲げながら、一方で男女の役割に明確な線引きを行ってきた近代社会のありかたにも対応する。その歴史叙述に違和感を持つ者は、女性の個々の経験や実感を積み重ねることで、自前の歴史像を描くことになった。

しかしながら、女性史とオーラル・ヒストリーとの関係でより重要なのは、このような制約があったことではなく、制約を逆手にとり、オーラル・ヒストリーを介して語る者と聞く者の間に独自の関係性を築いてきたことにある。

女性史ではすでに1950年代に、オーラル・ヒストリーを取り込んだ歴史叙述が、山代巴らにより農村女性の声を拾うというかたちで遺されていた。その叙述の体裁は、オーラル・ヒストリーを史実実証のための資料と考えるのならば、語り手の基礎的データが示されていないかたり、歴史的事実と語り手の推測の区別が明確でないなど、期待される形式からは大きく隔たったものであった。しかし、聞き取り手が物言わぬ人たちの具体的存在に目を向けたという点において、また、その聞き取り手を信頼して語りだした人たちがいたという点において、女性史におけるオーラル・ヒストリーの原点となるものだったといえる。そして、この関係が、オーラル・ヒストリーを語る側が「女性であること」にまつわる問題の当事者であると同様に、それを聞き取る側も、「女性であること」についての問題を自身の問題として抱える当事者であったという共通項によって成立していることに、読者は気がつくであろう。

例えば、丸岡秀子は、農村の人々に、「農村の嫁」について書いてもらい、そこから発見された問題を、「私たちみんな」の果たすべき仕事として取り出すことを試みた。集まった記録をもとに『女の一生』を書きあげた丸岡は、「農村の嫁」の姿に農村の深い谷間があることを強調する。彼女が、終生、農村女性の現実にこだわり続けたのは、農村女性の苛酷な労働を知る自分の生い立ちにあった。夫の死後、農業で母との生計を立ててきた山代巴は、農村で女性が「ほんとのことを言える空気」をつくるため、まず自分が、「秘密の守れるふところ」になることを目指していた。その中で「私も私の母も、私に秘密を訴えてきた幾人かの、共通に持っている、一途な焰のようなもの」を感じさせる女性に出会う。彼女は山代に、労働と家族内の葛藤に明け暮れた半生を語り、それを山代は『荷車の歌』に結実させた。溝上泰子は、山陰地方に暮らす農村女性たちとの付き合いを通して知り得た、彼女たちの思いや記憶を、一人一人の固有名詞と共に、『日本の底辺』にまとめた。「沈黙の地帯」から「貴重な鉱脈」を掘り当てようとする溝上の原点には、「一生を最低のところ座を据えて、黙々と生きてきた」自身の母親があった。

このように、オーラル・ヒストリーの記録は、「文字を持たない女性」や「自らは語ることをしない女性」の具体的経験や記憶を、「筆を持つ女性」が解釈し、それを歴史の文脈に位置づけることから始まった⁽⁴⁾。「女であること」の当事者性を担保とした語りの場の共有は、女性史とオーラル・ヒストリーとの関係を深く規定している。女性の語りを「女」という枠組みの中に囲い込む志向は、女性の「一般」からの疎外として作用する一方、聞き手も語り手も女性（もしくは女性の視点と自分を同化しようとする者）である場合、語りの場に、「女」にまつわる経験をしたもの同士という共感の磁場が作られる。語る側は「女だからわかるはず」と期待し、聞き取る側は、それを

「女だからわかりたい」と受け止める。専門性や公益性が価値を持たない場で、この関係性が、女性史におけるオーラル・ヒストリーに独自の位置づけを与えてきた。特に、高度経済成長期になると、この共感の磁場を自覚的に取り入れた歴史叙述が生みだされていく。それを主導したのは、主にアカデミズムに席をもたない人々たちであった。

高度経済成長の時代は、「農村問題」「貧困問題」等という一般化への道が見通しやすい事柄に代わり、「女性である私」とは何かを問う視点が、女性をめぐる問題として浮上した時代であった。この関心のあり方は、「私」に思考の起点を求める時代状況⁽⁴⁾を反映している。同時に、当時の女性史の伏流には、戦争体験の悔恨を核に、抽象的大義名分ではなく現実の生活に視座をおいた思想を、人々の有機的つながりの上に構築しようとする思想潮流があった。この「女性である私」に軸足を置く問題意識は、オーラル・ヒストリーが語られる場に、新たな関係性を持ち込んだ。従来の、矛盾に直面している女性たちと、その声を採取して事態の改善を図ろうとする者という関係と異なり、追究すべき問題を抱えているのは語る側ではなく、聞く側であった。「私」が焦点となれば、聞き手も生身の個人として語り手に対峙せざるを得なくなったのである。

女坑夫たち10人の語りを『まっくら』にまとめた森崎和江は、聞き取り当時、筑豊の炭住に住みサークル誌『無名通信』の編集をしていた。1959年から2年間発行された『無名通信』は、「疎外されつづけた女の状況と意識を女性自身の手で解放していくこと」を目指し、母や主婦という与えられた名前に括られることを拒んで、各人の経験の個別性、多様性を受け止めることを宣言していた⁽⁶⁾。森崎にとって、オーラル・ヒストリーの聞き書きは、その実践として自覚的に選び取られた方法であったと言える。『まっくら』は、「女たちの内発性とまっこうから拮抗しない、ニッポン、武士道、ものあわれ、近代」に憎悪し、そんな自分にげっそりして、女なんかそくえ、と叫びだす森崎自身を描くところから始められる。森崎が坑内労働をしてきた女性たちと対するのは、この帰るところのない自分を「最後の焼く」ためだったという。実際、章ごとに挟まれた語り手に対する森崎の解説は、時として容赦ない批判を含み読む者をたじろがせるが、それは女坑夫の記憶と語りを通して自分を審問しようとする森崎の切実さが表出する場面でもあった。しかし、あとがきで、森崎は、女坑夫たちが見せる「宙ぶらりんな表情」の意味が了解できるようになったと記

(4) とはいえ、1960年代まで、「科学的」女性通史として、職場サークルや読書会で読み継がれていたのは、「女性解放」の政治的道筋の上に女性の存在を書き込んだ、井上清『日本女性史』（三一書房 1948、なお、1953年に改訂版が、67年には新版が出ている。但し、叙述の視点は踏襲されている）だった。その叙述は明快であったが矛盾が階級問題に一元化され、女性が抱える困難さへの内在的理解や、経験の具体性への関心は乏しかった。オーラル・ヒストリーを女性の通史に組み込むことの積極的意味が指摘されるのは、村上信彦『明治女性史』の出版と、それに続く論争までまたなければならなかった。女性史が歴史学のメインストリームでなかったのと同様に、聞き書きは、まだ女性史のメインストリームではなかったのである。

(5) 安田常雄は、この時代の社会意識が、家族・社会・国家・歴史を捉える思考の根底に、「自分」と「いま」をおくようになったことを指摘し、これを、「今日まで続く歴史学の動揺の萌芽」と位置づけている（安田常雄「方法についての断章」歴史学研究会編『戦後歴史学再考』青木書店 2000）。この「動揺」は、女性史にとっては地歩を固める機会となった。

(6) 天野正子『「つきあい」の戦後史』（吉川弘文館 2005）pp.143～150参照。

す。「宙ぶらりんな表情」とは、地底の、愛と労働が一体となった生活理念において「ひとりひとは敗けていないのに、何かがおかれた、それは何だろう」という疑問だと森崎は解釈する。ここで読者は、森崎が、女坑夫たちの言葉にならない声の「代弁者」となったことを知るのである。

青年期の自身の経験から、アジア女性と手を結ぶことを切実な課題としてきた山崎朋子は、東南アジアに出稼ぎにいった「からゆきさん」を、「エリート女性史への強力なアンチテーゼ」であると考えていた。なぜなら、「からゆきさん」こそが「階級と性の桎梏」にある「日本女性」の苦しみ「集中的表現」だからである。しかし、彼女たちは自ら文字で生活の「実情」と「苦悩」を訴えることができないと予想される。ゆえに、その「本当の姿」をつかむには、「生き残りのからゆきさんから、その生活と思想のすべてを抜き出すことから始める以外に方法がたない」。山崎は「地を這うようにして生きてきた海外売春婦」を探す旅に出る。「からゆきさん」でも成功した人は、山崎の対象の外にあった。山崎のなかでは、自分から文章を残さない対象ゆえにオーラル・ヒストリーに頼るしかないという手段上の要請と、女性史が女性史であるためには、オーラル・ヒストリーでしか歴史が残せない人を対象とすべきであるという認識が、予め一体化していたのであった。結果として、おサキさんという元「からゆきさん」に出会い、『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章』に結実するのだが、それは元「からゆきさん」からの聞き取りの記録でありながら、同時に、聞き取る側である山崎の、自分語りの作品でもあった。

森崎は、オーラル・ヒストリーの間を経て、語る者の代弁者という立場に至り、山崎は、オーラル・ヒストリーの語り手との対話を通して、自分の存在を語った。しかし両者は、語りの場が、単に歴史の実証や現実の告発の資料採取をする場ではなく、記録する側の（そして、その背後にいる読者の）存在のリアリティーを照らす場である点で共通していた。

こうして、1970年代までに、女性史では、語る者と記録する者の「女性であること」という共通項を足場とした関係のあり方が、経験として蓄積されていった。語り手が無名であることや、底辺であること自体に価値が見いだされたことは、政治史における官僚や政治家への聞き取りの視座と異なるだけでなく、古老や篤農家の語りを重んじる民俗学の立場とも一線を画すものだった。ここに、女性史の、いささかの屈折を伴った独自性があった。1960年代後半の日本でオーラル・ヒストリーが注目を集めたことについて、中村政則は、「階級概念の中に押し込めて扱うのではない生身の民衆像に興味や関心がよせられるようになった」証左として捉え、その背景には「集団から個へ」という思潮の変化があると指摘した⁽⁷⁾。しかしながら、女性史におけるオーラル・ヒストリーは、一方でそれまでの歴史叙述から顧みられることのなかった人々を結びつけ、「女である私たち」という目に見える形に立ち上げる役割を果たすものとなった。

ところで、オーラル・ヒストリーは、既存の歴史像を乗り越えるための素材としてだけでなく、しばしば、聞き取る側の歴史認識を「啓蒙」する手段として意味を与えられてきた。顔の見える先達から直に話を聞くことで、聞く側に、歴史の当事者意識が芽生えることが期待されたのであった。この志向は、戦前の愛郷教育から現在の社会教育事業に至るまで続いている。そして、既存の歴史叙述の中では傍流である女性は、「啓蒙」の対象としては主流に位置づけられてきた（もしくは

(7) 中村政則「オーラル・ヒストリーと歴史学」(『歴史学研究』1987年6月号)。

「学習」の主体とされてきた)。女性史とオーラル・ヒストリーの関係を俯瞰するならば、「啓蒙」の手段としてのオーラル・ヒストリーというあり方も見落とすことはできないであろう。

この点で、1950年代のはじめ、民衆が歴史の「創造的主体」となるために、民衆自身が聞き取り調査や民話・伝承の収拾を行い歴史叙述に仕上げることを提唱した「国民的歴史学運動」が題材の一つとして「母の歴史」を掲げ、それに呼応したのが女性グループであったのは示唆的である⁽⁸⁾。10代後半世代の紡績労働女性たちを中心としたサークルがまとめた『母の歴史—働く娘が綴った母の生い立ち』は、「国民的歴史学運動」を推進する人々から、運動の意図を具現化したものとして賞賛された。『母の歴史』は、母親への手紙による質問や周囲の記憶をもとに自分の母を「ありのまま」に書くことで、「しょうがないとあきらめる」母の歴史を繰り返さない母親になることを展望するものであった⁽⁹⁾。また、厚生省職員歴史サークル木曜会の女性たちは、教育大学の学生のアドバイスの下に、母親たちにアンケートをとり、そこから浮かび上がる母のストーリーを絵巻き物にした。その経緯を報告した文章には、自分たちで考え自分たちで作業をすることがいかに充実した時間であったかが記されている⁽¹⁰⁾。運動を牽引した石母田正は、後に運動を顧みた文章で、サークルで「母の歴史」等を書く目的は、「表現という創造的な仕事を媒介として、新しい自分を作り上げてゆく」ことにあり、それは「科学的」歴史学研究とは「歴史叙述のジャンルと質」が異なるものだったと述べている⁽¹¹⁾が、まさに彼女たちの歴史実践は、その目的の受け皿になったのである⁽¹²⁾。

「国民的歴史学運動」は、1950年代初頭という特殊な政治状況を背景にマルクス主義系歴史学界を席卷したが、政治状況の変化に伴い数年後には瓦解する。しかし、女性史の分野では、「歴史の創造的主体となる」という運動のスローガンが、政治状況と切り離され、歴史実践の目的として生き続け、その方法として聞き書きが位置づけられていった。長年、自治体による住民参加型の地域女性史編纂に携わってきた折井美耶子は、「国民的歴史学運動」が自分の歴史研究の原点であったと語る。折井は、聞き書きに参加した住民女性たちが、「お互い自分たちも歴史の担い手である」という共通認識をもつようになることを指摘し、「市民参加の地域女性史編纂は一種の社会教育、

(8) 最初に「母の歴史」という視点を示した石母田正「母についての手紙」(『歴史と民族の発見』東京大学出版会 1952)は、母たちの「悲しみ」と「犠牲」の上に活動している「私たち息子」への呼びかけだった。

(9) 「生活を記録する会」東亜紡織労働組合泊支部編『母の歴史—働く娘が綴った母の生い立ち』1953(『紡績女子工員生活記録集』第1巻 日本図書センター 2002所収)。

(10) 厚生省木曜会「『母の歴史』をつくる中で」(『歴史評論』1954年7月号)。

(11) 石母田正「『国民のための歴史学』おぼえがき」1960年(『石母田正著作集』14巻 岩波書店 1989所収)。なお、聞き書きが推奨されたのは、その学問的有効性が評価されたためではなく、手法と対象が手近であるゆえとされていた。

(12) ただし、このことは、彼女たちの叙述が「国民的歴史学運動」が要請する歴史観に沿ったものであったことを意味するものではない。生活を記録する会や女性サークルによる、聞き書き記録や体験集の叙述は、しばしば、「科学的」視点から逸脱し、統御されない主観や実感が混在していた。そこに、叙述者自身の体験から編み出された歴史観が表出しているのだが、それを「ありのまま」に取り上げ内在的に理解する視点が、運動を指導する側には希薄であった。

成人教育だとも私は思っています。」と結論している⁽¹³⁾。また、1970年代の終わりから旭川の女性史サークルに講師として参加してきた山村淑子は、聞き取りを「書き手と話者が相互に歴史認識を深めていく作業」と位置づけ、学習を通して、サークル参加者が女性も戦争協力者であったと「自覚」したことを、成果として記している⁽¹⁴⁾。オーラル・ヒストリーを、聞き手の学習として位置づける女性史独自の志向は、その後の社会教育と女性史との親和性を支え、グループ活動による地方女性史編纂の隆盛につながった。

2 オーラル・ヒストリー経験の課題

1980年代に入ると、女性史はアカデミズムの1ジャンルとして認知されるようになった⁽¹⁵⁾。背景には、「近代」を相対化するジェンダーという分析軸をもったフェミニズム思想を、既成の学問体系が無視できなくなったことがあろう⁽¹⁶⁾。その中で、女性史の歴史叙述も、制度化された学問領域に適合的なものとなっていく。個人の体験の問題意識や実感に根ざした叙述から脱し、他者の検証を可能とするための客観性や実証性を備えた、いわゆる叙述の普遍化が進むのである⁽¹⁷⁾。しかし、一方で、学問領域全体からみれば、この時期は、近代の学問領域を統括していた普遍性、客観性、実証可能性といった価値に対して、構築主義から疑義が呈された時期でもあった。そして、フェミニズムも、普遍的記憶に対して個別的記憶、客観性に対して当事者性を対峙させ、認識の再審を求める立場にあった。1990年代に入ると、実証を主軸としてきた日本の歴史学自体も、この思潮への対応を迫られるようになっていく⁽¹⁸⁾。

(13) 折井美耶子「女性史とオーラル・ヒストリー」（史資料ハブ地域文化研究拠点総括班『史資料ハブ地域文化研究』2号、2003年）。

(14) 山村淑子「地域女性史とオーラル・ヒストリー」（『歴史評論』2004年4月号）。

(15) これは、女性史総合研究会編『日本女性史』（東京大学出版会）の出版や、大学での女性学・女性史と銘打った講義の増大に象徴される。鹿野政直『婦人・女性・おんな』（岩波書店 1989）p.64参照。

(16) フェミニズムが提示したジェンダーという視座の導入は、従来の女性史が、性別による領域分担に陥り歴史のメインストリームを穿つ手法を持ち得ないことを突き、それを乗り越えようとするものだった。しかし、少なくとも日本では、フェミニズム思想への注目によって、ようやく女性史という従来の領域にも制度化された学問の関心が向くようになった。

(17) 女性史の活性化を背景に出版された歴史科学協議会編『女性史研究入門』（三省堂 1991）は、「聞き取りの意義と方法」という項目を立てている。そこでは、実証性を重視した立場から、聞き取りはあくまで第二次資料であり、文献資料による研究の裏付けがあってはじめて生かされることが強調されている。

(18) 認識論の転回に対する日本の歴史学会の反応は、歴史学研究会編『戦後歴史学再考』（青木書店 2000）参照。なお、オーラル・ヒストリーと歴史的事実との関係を、構築主義との対抗のなかで論じた桜井厚「オーラル・ヒストリーの対話性と社会性」（『歴史学研究』2006年2月号）は、構築主義とインタビューを通して現在から過去を構成しようとするオーラル・ヒストリー研究の方向性が重なる点を認め、インタビューの相互行為を重視する対話的構築主義の立場を示す。一方、中村政則「オーラル・ヒストリーの可能性」（神奈川大学日本常民研究所論集『歴史と民俗』2007年2月号）は、構築主義に「最後の一点」で納得がいかないことを表明し、オーラル・ヒストリーの「事実」（社会的事実）とは別の「事実」（歴史的事実）の存在を強調している。

学問としての精緻化の要請、認識論による価値の転換、フェミニズム思想の展開という、女性史に向けられたそれぞれベクトルを異にする問いかけは、従来の女性史とオーラル・ヒストリーの関係も問い直した。それにより、女性史の経験の何が問われ、どのような課題が明らかになったのかを、以下で考えてみたい。

「女性であること」を介した、語る者と聞き取る者の場の形成は、女性史に独自の歴史叙述を作り出した。しかし一方で、「女性であること」によりかかった聞き手の思い込みで、語り手の存在が塗りこめられ、語り手の個別の経験が後景に退いてしまった叙述も多かった。「女性である」という資格に依存した聞き取りの方法は、聞き取る側の立場性についての認識を鈍感にする。このことは、歴史学の普遍性や科学性を重視する立場からは、女性史の自己完結性、非科学性の証左として批判されよう。しかし、女性史という領域の独自性を尊重する者にとっての、より深刻な問題は、「女性どうしである」ことは語りの場で何の担保となるのか、についての省察が十分に積まれてこなかったことにある。

語る側と聞き取る側の立場性に自覚的にならざるを得ず、ゆえに問題提議を重ねてきたのは、オーラル・ヒストリーが当人の痛みの記憶に重なるセラピーやカウンセリングの分野であった。ドメスティックバイオレンスのサバイバーへの調査を行ってきた内藤和美は、「専門家」から一方的に定義されることに抗議するサバイバーたちに出会う。内藤は、「集められた記述に加えられていく私の言葉は、他者の経験を説明～定義してしまう暴力であった」と、個々人の言葉を自分という他者の目を通して叙述し直すことの問題をつく⁽¹⁹⁾。同様な場面に遭遇した二見れい子は、当事者の体験が、サバイバー支援者間で「事例交換」され、それが「女性は広い意味ですべてサバイバー」という理論で正当化されることに強い疑義を呈している。二見の疑義は、全体の利益は個人の痛みを優位するののかという問いでもある⁽²⁰⁾。また、韓国の元「従軍慰安婦」の支援活動をしている坂本知壽子は、裁判に有効な「証言」にのみ意味を与えられる元「慰安婦」の尊厳は、いかに確認されるのかを問う。坂本は、告発の資料としての「証言」だけでなく、彼女たちの言葉、おしゃべり、つぶやきなど全てから、存在のリアリティーを聞き取ることの必要性を訴えている⁽²¹⁾。

内藤らの考察を、歴史叙述の問題に置き換えて受け取るならば、オーラル・ヒストリーは、語り手に属するのであり、聞き取る側は女であろうとなかろうと、その外部にいるのである。確かに「私たち女性」という予見をもって語りを促せば、語り手が聞き手の統制した文脈の中でのみ語っていることにも気づかなくなる。とはいえ、語りの場は、語る者と聞く者とで作られる。私が行った農村の調査でも、ある農家の女性は、「おたくさんは、ご養子さん？」と、私がかつて嫁いでないことを確認した後に、農家の長男に嫁いだことの苦労について語りはじめた。娘の死をめぐる話に私が思わず涙すると、「そっちが泣いてどうするん」と気を遣い、口調のトーンを変えて心の襷に

(19) 内藤和美・辻智子「フェミニストであること研究者であること—個人史を題材に」(『女性学』8号, 2000年)。

(20) 二見れい子「支援関係づくりのプロセスにこだわる」(日本女性学会『女性学』8号, 2000年)。

(21) 坂本知壽子「「尊厳」概念から見直した日本軍「慰安婦」問題」(京都橘大学『女性歴史文化研究所紀要』14号, 2005年)。

一步踏み込んだ話を始めた女性もいた。彼女たちは、「女どうし」という関係をよすがに、聞き取りという日常生活に調和しない時空間に対し、何らかの協同的意味を与えようとしてくれたのである。同時に、「子どもさん、いらっしゃる？」という質問が出ると、私は一瞬ひるむ。「いないんです」と答えると、さりげなくだが確実に、親密だったはずの空気がふっと薄くなり、相手が少し距離をとりだすことを幾度も経験したからである。女性どうしであることをもってしても、相手との一体化はなしえない。経験と記憶の当事者にとって、聞き取り手はあくまで他者である。しかし厄介なことに、語りの場を共に作った他者なのである。とすれば、語られた記憶や経験は、誰に所属するのだろうか。「女性である」ことの問題や葛藤を共有しているという確信をよりどころに、聞き取り手が、語る側の記憶や経験を代弁したり、解釈したりすることは許されるのだろうか。相手の内面に踏み込み、聞き取りをし、解釈する「私」とは、いったい何者なのだろうか。

この点についてドメスティックバイオレンスのサバイバー女性へのインタビューを通した、高井葉子の以下の考察が参考になろう。高井は、女という共通項によって、サバイバーである「あなた」の語りの中に、調査者である「私」が引き入れられる時、「あなたにとっても近いところにいる自分」を感じるという。しかし、そこには、「互いの同質性が異質な部分への意識を曖昧にし、両者の間にある境界線をあつという間に踏み越えてしまう」危うさが存在する。また、親密性が増すことは、「あなたの世界へ「侵入」した」ことでもある。「あなた」と「私」のこの困難な関係のなかで、どのような叙述が可能なのか。高井が行き着いたのは、「私」と対峙していた「あなた」についての理解を記述するために、「私の存在を書き込むこと」、つまり「あなた」に近づいたと感じる「私」の存在を、「あなた」との位置関係として明らかにすること、であった⁽²²⁾。

立場性の問題とともに、女性史の蓄積のなかで今ひとつ欠落していたのは、語り手側の記憶がどのように作られるのか、作られた記憶は他の記憶とどのように対抗または交差するのか等、オーラル・ヒストリーそのものの位相を問う視点であった。これは、女性史が、語り手と聞き手の経験の共振を足場にしてきたため、語り手の記憶が聞き手の「実感」に沿う限りにおいて、その真実性を疑う必要がなかったためと思われる。

オーラル・ヒストリーの位置づけを差し迫った問題として女性史に突きつけたのは、周知のように「従軍慰安婦」問題である。「従軍慰安婦」にされた人々が日本政府に過去の謝罪と補償を求めた時、問題は日本軍が慰安所開設や運営に直接関与したのか否かに読み替えられ、「文書で検証で

⁽²²⁾ 高井葉子「インタビューの現象学—〈あなた〉の前にいる〈私〉の経験」（桜井厚『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房 2003）。なお、叙述の方法として、聞く側の目的に併せて語り手の語りを裁断せず、あえてオーラル・ヒストリーを丸ごと提示する手法は、近年、歴史の分野でも社会学のライフヒストリー調査の方法論を得て浸透してきているが、早い段階では、神田三亀男『原爆に夫を奪われて』（岩波書店 1982）が、原爆「未亡人」に原爆時の体験のみならず自身の一代記を語ってもらい、それを提示するという方法を自覚的に採用している。また、歴史叙述に、聞き取り手と語り手の場を書き込むのは困難な試みであるが、一人の元ホステスとの継続的聞き取り調査を行っている、小野沢あかね「戦後沖縄におけるAサインバー・ホステスのライフヒストリー」（琉球大学法文学部『日本東洋文化論集』12号 2006年）は、その困難さに挑戦している。

きないから軍の関与は認められない」という議論が繰り返された。この議論自体は極めて稚拙なものであるが、しかし、公の文字記録と、個人の経験から作られる記憶は、どちらが優位にたつのかという問題設定は、女性史が開拓したオーラル・ヒストリーという世界を、女性史自身がどう回収するつもりなのかを問うものであった。また、「従軍慰安婦」の記憶を支持する立場から、個人の記憶を公の歴史と対峙させる視点が主張されたか、となれば個人の記憶はあくまで、個人に属し、それを集積することで普遍化された歴史につなげようとする試みは遮断されることとなる。「従軍慰安婦」問題によって、女性史は、「女だからわかる」の世界に留まることは許されないことが明らかになり、他者の経験とその記憶を、どこまで覚悟をもって引き受けられるのかを試されることとなった。なお、この課題に正面から応えたものとして、1996年から中国山西省で、日本軍による性暴力被害にあった女性の聞き取りを行い、『黄土の村の性暴力』にまとめた石田米子の実践⁽²³⁾がある。石田は、性暴力の実態は文献では掴めないと言う現実を前に、オーラル・ヒストリーと文献資料との架橋を、被害を受けた者の当事者性に徹底的にこだわる地点から試みる。石田にとって、あくまで「一人一人がどのように自分の被害を感じて、どのように語ろうとしているのか」こそが大切であり、時の記憶の曖昧さ、揺れもそのまま受け止める。しかし、石田の議論は、被害女性の記憶か公文書の記録かという接点のない対立に空転することはない。石田は、当事者性にこだわる一方で、それを史料批判の手法で検討することにより、被害女性、彼女たちの家族、村、より上位の共同体の、それぞれの記憶と記録を照合していく。その結果明らかになるのが、「記憶の共同体」を構成している村の男性と、自分の経験を物語化する機会をもたなかった被害女性という記憶の成り立ちがはらむ階層性であった。また、自らの体験しか語ることができない被害女性は、家族、村、国家、日本軍兵士、日本政府という「幾重もの抑圧」により沈黙に追い込まれていくという、歴史叙述のあり方に潜む性差もあぶり出されていった。

ところで、女性史は、女性を作る女性の歴史という傾向が顕著な領域であった。しかし、「女であること」の自明性に疑問符を突きつけるジェンダーという視点が獲得されると、オーラル・ヒストリーを語り、聞く場において「女であること」自体の意味づけが問い返されるようになった。

語る側のジェンダーについては、桜井厚が、『女たちのライフストーリー』（谷沢書房 1991）の編著に関わった経験などから、男性と女性の語り方が異なることを指摘している。桜井によれば、男性は、ジェンダーカテゴリーが無徴化されているので、自分を語りさえすればよいのだが、女性は、女性のマスター・ナラティブやモデル・ストーリーを意識することが求められてきた結果、自己を呈示する際、それらに対して、同調、妥協、葛藤、反抗、拒否などの対応関係を語らざるを得ない。それゆえ、女性の語りには、常に社会のジェンダーカテゴリーとのダイナミズムが反映されているという⁽²⁴⁾。農民運動の調査を通して農村の家族への聞き取りを行ってきた大門正克も、学校教育や就いていた役職による時間軸を持っている男性と、それらの時間軸と疎遠な女性は、質問

(23) 石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力－大娘たちの戦争は終わらない』（創土社 2004）、石田米子「中国における日本軍性暴力被害の調査・記録に取りくんで」（『中国女性史研究』11号 2002年）。

(24) 桜井厚「ジェンダーの語り」と語り方」（『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房 2003年）。

への対応も異なることを指摘している⁽²⁵⁾。

一方、聞き取る側にもジェンダー 이슈が働く。中野聡は、昨今の聞き取りの調査に携わる人々には女性が多いことを指摘している⁽²⁶⁾が、確かに、日本オーラル・ヒストリー学会への参加者をもみても、他の歴史学領域と比較して女性が多い。戦争と記憶の問題に関わるインタビューを現地で行っている人々にも女性が目立つ。これはなぜだろうか。第二次世界大戦中に日本軍捕虜だったイギリス人へのインタビューを行っている中尾知代は、「敵国」側の自分がインタビューアとして受け入れられる理由の一つに、自分が女性であることを挙げている。女性には、もともと「受け手」「癒し手」としてのイメージがあり、また日本人女性は「良い貞淑な妻」であるというステレオタイプがあると推測されるからである⁽²⁷⁾。女性のオーラル・ヒストリーの蓄積は、多く女性の手によってなされてきたが、それは、女どうしであることの感応力が有効であっただけでなく、女性のマスター・ナラティブに従うものであったのかもしれない。だとするのならば、聞き取り調査が女性の「学習」として歓迎されている傾向は、女性の歴史認識への関心だけではなく、歴史実践のジェンダー性を示しているともいえよう。なぜ、女性史はオーラル・ヒストリーだったのか、語る側、聞く側それぞれのジェンダーの視点からの再検討が必要となっている。

3 オーラル・ヒストリー研究と女性史の経験

さて、近年オーラル・ヒストリーの再評価がなされている。例えば、文献資料に恵まれている政治史の分野で、聞き取り調査の成果が公文書記述を補完するものとして積極的に取り入れられるようになった。オーラル・ヒストリーの記録を一定の秩序のもとに収集し保存するアーカイブスの試みも、公的財源を得てはじめられている。2003年には、地域女性史に関わってきた人々を中心に、オーラル・ヒストリー研究会が立ち上げられ、また、同年、国際オーラル・ヒストリー学会との交流を前提とした日本オーラル・ヒストリー学会が設立されている。

女性史の経験は、このようなオーラル・ヒストリーをめぐる新たな動きにどう関与し得るのだろうか。最後に、この点について若干の指摘を加えたい。

政治史分野がオーラル・ヒストリーに着目したことで、オーラル・ヒストリーの手法は格段に洗練化した。実証に貢献する技法が蓄積され、方法論も整備されてきている。しかし、この洗練を主導してきた御厨貴の定義が示すオーラル・ヒストリーの地平が、女性史が開拓しようとしてきた場所と位相を異にすることは最初に述べた通りである。体系化された知見ではない個別の経験に、均衡のとれた論理ではない整理し難い感情に、中心であることよりも周辺の営みに、公の目的ではな

(25) 大門正克「聞こえてきた声、そして「聞こえなかった声」」（『歴史評論』2004年4月号）。併せて大門は、女性の聞き取りと男性の文字資料を組み合わされることで、両者の関心の交差、ずれなどが把握でき、そこから、ジェンダーの非対称性を捉えることが可能であると、方法論に言及している。

(26) 中野聡「コメント：戦争史とオーラル・ヒストリーアン」（『歴史学研究』2006年4月号）。

(27) 中尾知代「戦争・植民地にかかわるビジュアルオーラル・ヒストリーの方法」（『史資料ハブ地域文化研究拠点総括班』『史資料ハブ 地域文化研究』2号 2003年）。

く私的問題に、それぞれ意味を見いだしてきた女性史の経験は、御厨が定義するオーラル・ヒストリーの洗練と同じ歩調をとることはできないであろう。ただし、2で述べたように、女性史のオーラル・ヒストリーが「女だからわかる」の世界に留まることも、もはや許されない。これは、学問の体裁の問題としてではなく、オーラル・ヒストリーを語る側の語りの重みを、どれだけ歪曲したり、歪曲されたりすることなく位置づけられるか、という、聞き取る側の責任の問題として、意識されるべき事柄である。特に、旧占領地や植民地の女性、性被害にあった女性たちへの聞き取りが急務となっている現在、政治史とは別の地平を開くための方法論が、女性史の経験を通して発信される必要があるようになっていよう。

オーラル・ヒストリーの聞き書き、音声、映像のアーカイブ化は、資料が当事者の占有を超えて外に開かれる点で、女性史にとっても望まれる作業である。各地の地域女性史グループが集めた記録の散逸が問題となっている⁽²⁸⁾ 現在、一定の秩序とインデックスが備えられた場が設置されれば、女性史の経験への他領域からのアクセスが可能となり、相互批判にも役立てられよう。反面、女性史のオーラル・ヒストリー経験が築いてきた、語る場での、語る側と聞く側の共感の磁場は、アーカイブでは貯蔵できないことも銘記されるべきである。中尾知代は、聞き取りを「法廷の証言になりえるか、あるいは反対尋問に耐えうるものにする」と位置づける考え方に対し、聞き取りの魅力は、実証性に収まるものではなく、リズム、喜怒哀楽、感情の起伏、軽やかさと楽しみ、弾力性などから伝わる「感動（と畏怖）をともなう、あの響きあう思い」にあると述べる⁽²⁹⁾。この魅力に遭遇するには、語り手と聞き手が距離を縮めるための時と場が必要である。この時と場を経ない者が、聞き取りの場面を、アーカイブスの映像や音声の記録の上からなぞっても、魅力に気づくことは出来ないであろう。古庄ゆき子『ふるさとの女たち』は、幼少時に朝鮮半島から紡績工場に単身働きに来た女性の聞き書きを載せている。体験を時系列で話すことをせず、日本語の語彙も豊かではない語り手は、苛酷な体験についての「悲しかったでしょう」「辛かったでしょう」という問いかけには余り反応しない。しかし「なさない」という表現はよく使う。古庄は、ここから、悲しい、辛いという叙情的表現を受けつけないのは、これらの言葉に、直接肉体を傷つけられる世界とは違った余裕を読み取っているからだと推測する。この推測が正しいのか否かは、この聞き書きの様子が資料としてアーカイブ化されたとしても、そこからは判定しがたいと思われる。しかし、資料から判定できないから意味がないのではなく、資料の外に、現場を通して両者の距離を縮めていった者のみが感得できる事柄があり、それを除外しては描けない歴史もあることを、女性史の経験は強く主張している。

オーラル・ヒストリーの浸透は、住民（主に女性）による高齢女性のオーラル・ヒストリーの聞き取りが、自治体の男女共同参画事業の定番企画となっていることにも示されている。この動きの背景には、長年オーラル・ヒストリーの聞き書きを、歴史実践の一つとして取り込んできた地域女性史の経験がある。例えば県の男女共同参画事業として『岐阜県女性史－まん真ん中の女たち』の

(28) 1998年に開かれた「全国女性史研究交流のつどい」は、行政による女性史編纂事業で集めた資料の散逸を危惧し、「女性史資料の保存・公開についてのアピール」を採択した。

(29) 中尾知代「証言」（『現代思想』29巻15号 2001年）。

編集に参加した石月静恵は、準備段階でぎふ女性史の会から「有名女性の歴史ではなく、庶民女性史を明らかにすべき」という発言があったことを記し、また史資料収集・聞き書き調査を市民参加としたことが事業成功の要因だったとしている⁽³⁰⁾。しかし、出版されている聞き書き集の中には、「女性を主語とした歴史とは、頑張った庶民史である」というような、一面的記憶の積み重ねに荷担するものが散見される。これは、聞き書きという方法、庶民という対象が、叙述をする側の問題意識に沿った切実な選択としてではなく、すでに出来上がった女性史の定式として採用されていることに起因するのではないか。聞き取り調査は、問題意識や専門性がなくとも、数をこなすことは一応可能であり、共通項を持たない人々が一緒に行う歴史実践にも都合がよい。しかし、自身の問題という意識が後景に退き、庶民中心、聞き取り中心という形式だけが一人歩きしたとき、どのような歴史叙述が展望されるのだろうか。なぜ、地域女性史はオーラル・ヒストリーなのかということが、叙述者自身の問題として再検討される時期に来ていると思われる。

以上、女性史におけるオーラル・ヒストリー経験について概観した。これらの経験は、女性史がもつ立場性により独自の展開をしてきたが、一方で、オーラル・ヒストリー研究さらには歴史叙述とは、何について、誰が、何のためにするものか、という、歴史の根本的問題を問い返している。

（くらしき・のぶこ 四国学院大学准教授）

(30) 石月静恵「『岐阜県女性史－まん真ん中の女たち』の執筆を終えて」（『桜花学園大学研究紀要』2000年3月号）。